

尺度使用マニュアル

<尺度名>

「対象関係尺度（青年期用）」

<測定概念>

本尺度は、個人の対象関係を分析的・多面的に評価することを目的とした尺度である。対象関係とは、精神分析的な治療理論において扱われている概念で、「対人場面における個人の態度や行動を規定する、精神内界における自己と対象（他者）との関係性の表象」と定義される。対象関係を評価することは心理臨床の診断や介入において重要な観点であり、質問紙による簡便な評価を目指して作成された尺度である。

<適用範囲>

尺度作成に際しては、18歳～29歳の男女を対象に分析を行っており、この範囲における適用が望ましい。

<尺度構成手続き>

単純構造の尺度を目指して、各尺度の内容が重複しないよう測定内容の整理を行い、5つの測定内容を設定した。18歳から29歳までの男女566名（男性261名、女性305名）のデータを使用し、因子分析（最尤法・プロマックス回転）を行った。その結果、「①親和不全」「②希薄な対人関係」「③自己中心的な他者操作」「④一体性の過剰希求」「⑤見捨てられ不安」の5因子で単純構造を示す尺度構成が確認された。

<信頼性>

5下位尺度の α 係数は、.739から.834の範囲にあり、少ない項目数ながら一定の信頼性を確保できたと考えられる。

<妥当性>

妥当性については、以下の手続きを経て、本尺度の構成概念妥当性を確認している。はじめに、異なるサンプル（N=1041）を用いて交差妥当性を確認した。その結果、尺度構成に用いたデータとほぼ同様の因子構成が見られ、5つの測定領域を設定することの交差妥当性が示された。次に、性差・年齢差の検討を行い、予想された箇所で予想された方向に性差と年齢差が得られた。最後に、NEO-FFI（NEO Five Factor Inventory）を用いてパーソナリティ特性との関連を検討したところ、概ね仮説を支持する内容の相関が見られた。これらの結果から、作成された尺度の構成概念妥当性が確認された。

<採点方法>

回答方法は、「とてもそう思う」から「全くそう思わない」までの6件法である。採点は、「とてもそう思う」が6.0点、「そう思う」が5.0点、「少しそう思う」が4.0点、「あまりそう思わない」が3.0点、「そう思わない」が2.0点、「全くそう思わない」が1.0点として得点化し、各下位尺度の得点の平均値を算出することとする。

<尺度の使用について>

項目の変更は行われたい方が望ましい。下位尺度ごとの使用は可能であるが、標準化データとの比較が困難となる。

想定される尺度使用場面としては、基本的には、臨床現場での第一的な情報収集を念頭においているが、明確な判定基準は設けてはいない。従って、細かな得点差にこだわらず、他の資料（心理検査や面接データなど）と一緒に用いることが望ましい。また、その他の使用場面として、心理的援助・介入の効果測定、あるいは、臨床群に限らず、一般に自らの対人パターンを見直すといった自己理解を深めるための使用も考えられる。さらに、研究への応用として、一般的なパーソナリティ研究や対人関係の研究などへの使用も可能である。

<出典文献>

井梅由美子・平井洋子・青木紀久代・馬場禮子（2006）. 日本における青年期用対象関係尺度の開発 パーソナリティ研究, 14, 181-193.

<連絡先>

所属：お茶の水女子大学

氏名：井梅由美子

HZT04762@nifty.ne.jp

<無料・有料の別>

無料

<著作権関連情報>

転載は著者の承諾を得ること。

<その他>

教示文は、尺度のPDFファイルを参照のこと。項目の順番は変えずに施行することを奨励する。